

I 調査研究報告

漢長安城桂宮2号 建築遺跡B区の調査

調査の経緯と概要 当研究所と中国社会科学院考古研究所は、1991年度以来中国都城遺跡の共同研究を進めている。98年度は第2次友好共同研究の3年目にあたり、97年度に引き続き漢長安城桂宮2号建築遺跡を調査した。

桂宮については、既にボーリング調査と試掘調査によって、1号から12号までの建築遺構の存在が確認されている。97年度の2号建築遺跡の調査（A区）では、桂宮の正殿と思しき大規模な基壇の遺構を検出している。

本年度の調査地（B区）は、97年度の調査地の北側に道路を挟んで接する場所で、東西85m、南北45mの約3800㎡を調査した。調査地の北50mには、桂宮高台（1号建築遺跡）の版築遺構が約10mの高まりとなって残っている。

調査は1998年10月から1999年5月まで厳寒期の中断を挟んで実施し、当研究所からは、1998年10月から12月に清野孝之・平澤毅が、1999年2月から3月に島田敏男・佃幹雄・長尾充・渡辺晃宏が参加した。漢長安城考古隊からは、李毓芳（隊長）・劉振東・張建鋒の各氏が参加した。発掘調査の最終的な成果は、『考古』2000年第1期に掲載予定である。

なお、漢長安城考古隊と当研究所には、それぞれがフィールドとする遺跡の調査で培われた独自の発掘技術が蓄積されており、今回の調査ではそうした技術の交流にも意を注いだ。日本側からは、3mグリッドによる包含層の遺物の取り上げ（後述）、トータルステーションを用いた測量と遺構図の作成、4×5版カメラによる遺構写

漢長安城西南部配置図

真撮影（撮影用やぐらを使用）など日本式の発掘調査の紹介を行った。掲載の図面は、日本側参加者が作成した50分の1遺構実測図に基づく縮図である。

発掘調査の成果の概要 調査地は果樹園や小麦畑として利用されていた。基本的な層位は、上から耕土、包含層で、現地表下約1mで漢代の遺構面に達する。検出した遺構は建物基壇1、天井（採光と通風のための中庭）3、庭院2、窖穴（貯蔵穴）1、基壇上に掘られた地下室1、地下通路2などである。

建物基壇 昨年度検出した正殿基壇の北に、版築壁の区画施設を隔てて設けられた、東西78m以上、南北21mの大規模なものである。基壇上の建物は、3室の房、1基の地下室、2基の地下通路など7つの付属施設をもち、

■ 木欄干の痕跡
■ 卵石の残る部分
● 礎石

桂宮2号建築遺跡B区遺構図 1:600
座標は未央宮前殿にある基準点に基づくもの。下3桁のみ略記。

何棟かの建物の複合体であったと考えられる。基壇周囲の壁には、部分的に方形の壁柱穴とその礎石が現存するが、正殿基壇に比べると残りはよくない。

基壇南面には、基壇に昇るための通路が3本ある。東通路は版築壁とその西側の道からなる。中央通路は、中央の版築壁で分かれた東西の道からなる。西通路は東側の主道と西側の塼敷の廊道からなる。なお、後述の東天井に面して階段痕跡が1箇所残る。

基壇北面にも、基壇に昇るための通路が3本ある。中央通路はさらに北にある施設と結ぶもので、その西側は北に緩く傾斜した塼敷の広場（西庭院）になっている。敷き詰められた塼は1辺約35cmの方形で、これは漢代の1.5尺にあたる（1尺=23.1cm）。広場へは門道から西に降りる斜道、及び基壇北西部の木製の門を伴う斜道から降りられるようになっている。中央通路の東側の庭院（東庭院）も、削平が著しいが一部に縦使いの塼（線塼）列が残り、基壇に昇る通路があったと考えられる。

基壇南面の天井 基壇の南側に3つの天井を検出した。このうち東・中央の天井は、昨年検出した天井の続きで、その規模が確定した。天井の内側には散水がめぐる。散水は、塼を幅約80cmで二列縦に埋め込んで仕切とし、その内側を基壇に面した北面では卵石、他面はいずれも塼を菱形に組んだ後、廃材を再利用した細い瓦を埋め込んで化粧している。天井内部は塼敷で、東天井中央部やや

西寄りには、長方形の塼を組み合わせた一辺約70cm、深さ約1mの排水用の井戸（地漏）がある。

西天井は小規模で、散水も南北両面が瓦組、東西両面が卵石である。木製欄干を伴う通路があるのは南面だけで、東・中央の天井に比べるとやや小規模かつ略式である。散水の幅も1mと広く、塼の組み方もやや粗い。卵石散水の方が瓦組散水よりも格上であり、同じ基壇に面した北面の散水の構造が異なるのは、東・中央天井に面した部分と、西天井に面した部分とで、基壇上の建物の性格が異なるためであろう。

西天井の西側には、版築壁に囲まれた小部屋があり、ここには直径98cm、深さ325cmの塼積の窖穴が設けられている。

地下室 基壇上には東天井北西部に入口をもつ地下室がある。基壇中央やや南寄りに一辺約5.4m四方の主室と、それに南から取り付く長さ4.5m、幅1.4mの導入路からなり、基壇に沿って東から塼敷斜道を掘って入口としている。現存深さは約0.9m。

瓦組散水実測図 1:40

東地下通路（東から）

基壇南面の散水（西から）

地下施設の中では最も残りがよく、壁面はほぼ原形を保つ。まず日干煉瓦（土坯。埴よりは焼きが粗いが焼成してある）を積み、スサを含む泥の下塗、中塗、さらに細かい泥で上塗して仕上げ、壁柱を塗り込める構造になっている。中塗面には上塗土が付着しやすいように斜め十文字の筋が付けられている。壁面は焼けた痕跡が著しく、一部に炭化した柱も残る。

東地下通路 東天井の中央に面した基壇南端にあり、東西5.1m、南北1.4m、現存深さは約1.3m。底面に埴の目地の痕跡が残り、南北4枚、東西15枚の埴敷が復原できる。北面に5つ、東西両面に各2つ、南面に3つの礎石が残る。出入口として基壇南面に沿って東西二方向から埴敷斜道が設けられている。壁面の残りは悪く日干煉瓦が露出している部分もある。

中央地下通路 基壇中央を南北に横切るもので、長さ20m、幅は現在約2.5mあるが、日干煉瓦が崩落しており、両側面に約2m間隔で並ぶ壁柱の残存礎石からみて、当初の幅は約1.75mである。現存深さは約1.2m。床面には一部埴が現存する。現存しない部分も埴の目地の痕跡が確認でき、それによると一辺約35cmの埴が東西に5枚、南北に55枚敷き詰められていたらしい。基壇南面には東から、北面には西から斜道が設けられておりここも元来埴敷であった。斜道を降りきった入口部分と地下通路部分の間には段差があり、間に埴を縦に埋め込んで仕切としている。なお南斜道には瓦を充填した補修跡がある。
遺物 軒丸瓦、丸・平瓦、無文・文様埴、空心埴、土器、および少量の銅銭、鉄製品等が出土した。

今回の調査では、中国都城遺跡における遺物出土状況を把握する目的で、日本式の遺物取り上げ、計量法を一

出土遺物の重量計測値（単位kg）

	丸瓦	平瓦	無文埴	文様埴	土器	その他
中央天井	3.1	16.0	18.7	2.8	3.1	—
東天井	1.4	7.1	1.2	0.4	1.4	銅銭2点

部導入した。その方法は、調査区南辺の中央・東天井内に3mグリッドを各1箇所ずつ設定し、遺物包含層中の、遺構面より10～20cm程度上層部分で、厚さ約10cm（各約0.9m³）の土中に含まれる遺物を全て取り上げ、種類別に重量を計測するというものである。

その結果、極めて限られた範囲ながら、従来不明であった遺物全体の出土比率の基礎データを得ることができた。特に丸・平瓦の出土比率は両グリッドで類似しており、本来の瓦使用状況を反映している可能性がある。今後、さらにこうしたデータを蓄積していけば、多くの新たな知見が得られるものと推察する。

まとめ 2年度にわたる共同発掘調査で、桂宮中枢部の様相が明らかになった。劉慶柱氏の指摘によれば、昨年度調査したA区の基壇が1棟の建物が建つ儀式空間であったのに対し、今回調査したB区の基壇上には複数の建物が建ち、日常生活空間を構成していたと考えられる。これは未央宮2号建築遺跡（椒房殿）と同様、「前朝後寝」形式と理解できる。椒房殿にある東北の脇殿がないのは、皇后の宮殿と后妃の宮殿の格式の違い、「後寝」部分が椒房殿と異なり基壇をもつのは、前漢初期から中期にかけての年代的变化によるものと思われる。なお、北側の1号建築遺跡（高台）は、「後寝」のさらに背後に設けられた宮苑の中の楼観建築の遺構と推定される。

（長尾 充／飛鳥藤原宮跡発掘調査部、清野孝之・渡辺晃宏／平城宮跡発掘調査部）